

赤星

月刊

1月2002年 No.11 (通巻353号)

本号400円 (毎月1日発行)
年間購読料 1部3000円 (送料別)
(送料) 密封1000円 開封800円

THE SEKISEI (RED STAR/ROTE STERN)

編集 共産主義者同盟 (DER BUND DER KOMMUNISTEN)

発行所 蜂起社 東京都江東区大島3-9-25/TEL 03-5626-8262
(関西支社)大阪府北区菅栄町10-10 岸本ビル/TEL 06-6357-6975
発行人 南 安明 <振替> 00120-2-1512 蜂起社・南安明

紙面案内

- ① 年頭論文
- ② フランス訪問報告
- ③ 太田昌国氏サパティスタを語る
- ④ 反失業・反排除を闘う山谷から
- ⑤ 沖縄/アタックJ/蔵田計成
- ⑥ 三里塚反対同盟新年の決意

共産主義運動の再生へ 希望の「赤い星」たれ



共産主義者同盟 中央委員会

反帝国主義と国際主義の旗の下 全世界のプロレタリア、団結せよ!

BUND再建を期して 戦列を整え、なすべきことをなそう!

2002年の年頭に際して

はじめに

17年のロシア革命以後、最大の転機、「試練の時」を迎えている。

2002年の年頭にあって、我が共産主義者同盟(蜂起派)は、搾取され抑圧され貧困や失業にあえぐ民衆・プロレタリアートの最深部・底辺部から燃え上がる怒り、21世紀に入って確実な世界を席巻しつつある反グローバル化の闘いと結びつき、反帝国主義とプロレタリア国際主義の旗の下、革命的大衆運動、新たな国際連帯運動をともに創り出すことを訴えたい。

そして、我々は、参戦国と大失業時代に抗し、日米安保粉砕・有事法制・改憲阻止の闘い、フロント系をはじめ新左翼諸派との共闘を通して、この国の共産主義運動に、もう一度輝きとダイナミズムを取り戻していく決意である。

何よりも我々は、「共産主義運動の再生」をたぐりよせ、「フロント再建」の礎を築くこと、このことを自らの使命として強く感じている。そのために、我々は戦列を整え、なすべきことをなす。希望の「赤い星」になることを目指して!

共産主義運動再生を担う赤い星たれ

いま世界は、巨大な転換期の渦の中にある。その現れは、政治・経済・文化の領域や我々の周囲のいたるところに見られる。

一方、現代の共産主義運動は、未完に終わった「停滞」状況をより一層深刻な

ものになっていると言える。すでに既成(旧)左翼は、「冷戦」終焉後の十年間、社会党の解党、日本共産党の社民化に見られるように日本の政治地図から消滅しつつある。

新左翼も、このままでは遅かれ早かれ立ち行かなくなる。「籠城」しては落城する」と、という危機意識を持つべきであろう。

こうした新左翼を取り巻く状況認識を欠き、労働者・人民に団結をもちた望をもちた過去の失敗・誤りから教訓を学ばず、「独善」に陥っている限り、過渡期の「情性」と「停滞」に埋没し、「苦境」から脱することができず、払うツケは大きくなる。

有事法制や改憲が目前に迫っている時代状況にあって、なすべきことをなすか、成り行きに任せるだけか、新左翼・共産主義運動が、大きな転機に立たされているのは間違いない。まさに試練に立ち向かう我々の真価が問われている。

(2面に続く)

「共産主義」18号
1月下旬発刊予定

新たな国際主義を！

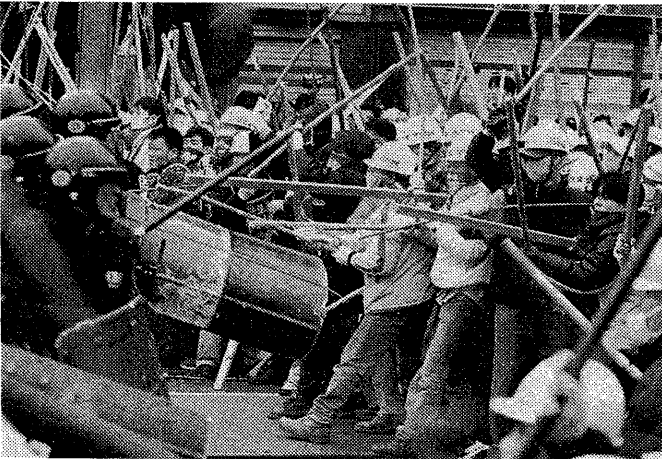
反グローバルリズムの新機軸打ち出し プロント再建へ挑む

いま、貧困と失業、不平等は南北問題を拡大させている帝国主義のグローバルゼーション——新自由主義

21世紀に入って最初の10年は、グローバルゼーションの矛盾が顕在化し、それに対する怒りが全世界で噴き出す時代になるだろう。



01年11月14山谷での日雇労働者協決起集会



韓国ソウル中心街で戦う大宇自動車の労働者たち

政策の下で多国籍化を進める巨大独占資本による世界支配——によって搾取・抑圧に苦しむ民衆の怒りが、世界中で渦巻いている。

21世紀に入って最初の10年は、グローバルゼーションの矛盾が顕在化し、それに対する怒りが全世界で噴き出す時代になるだろう。

世界の底辺部——現代社会の最下層（マルクス『共産党宣言』）——に追いやりられ虐げられた民衆・プロレタリアートの最深部の怒りに応え、連帯しようという行動（労働運動・社会運動）が、反グローバルリズムの声となって、確実に人々の心を揺るがせ、世界を席巻する拡がりを見せている。

今や「反グローバルリズム」は、帝国主義に反対し新たな国際主義を実現しようとするプロレタリアートの「旗印」になり、歴史を反転させつつあるのだ。まさに共産主義運動の再生が、歴史的な課題（選択肢）になる時代が到来しているのだ。

何よりも、プロレタリア大衆を反グローバルリズムの行動へ駆り立てているのは、グローバルゼーションによって貧困と失業にあえぎ、耐え難い痛み・犠牲を強いられ、多くの人々が存在しているという現実があり、怒りがマグマのようになっているからだ。

国から外国へ9526億ドル、外国から米国へ1兆1501億ドル（91-00年）と、いずれもそれ以前の40年間を上回るほどの巨額に達したことに、それが象徴的に示されている。ここに反グローバルリズムの闘いが一挙に噴出し、「新しい社会運動・労働運動」として——とりわけ仏や米国内で——最も重要な課題になってきた背景がある。

世界同時不況にみまわれ大失業時代を迎えた日本でも、グローバルゼーションの矛盾を肌身で感じながら、議会制民主主義の限界と既存の議会政変や左翼の体たらくに失望し幻滅している労働者・人民は、少なからず、とりわけ、貧困と失業にあえいでいる人々の「ルンペン・プロレタリア

怒りは深く充満している。その心の奥底にある怒りを引き出し大衆運動（労働運動・学生運動等）の前進と団結をもちたすことができない。だが、こうしたプロレタリア大衆の要求にこたえるべく我が国の新左翼・共産主義運動は、長い停滞と分散化した有り様に憤らされ、依然として立ち遅れた現状を脱しきれずにいる。そればかりか、相変わらず旧態依然とした古典的マルクス主義やスターリン主義に呪縛されたまま——例えば失業や野宿さえ余儀なくされ市民社会から排除されている底辺下層の労働者を蔑み「ルンペン・プロレタリ

多国籍化した独占資本が世界中の富を独り占め、貧しい者はますます貧しくなる貧富の格差（一握りの富豪と大多数の貧民）、不平等の拡大をもちたしているグローバルゼーションは、ナショナルリズムを新たに台頭させる自己矛盾をさらけ出しながら、カウンターパワーとして労働者・人民の大衆行動・国際的な連帯の拡がりをも生み出さざるを得ないのである。

実際、1990年代の10年間で、グローバルゼーションは、劇的な進展を見せている。対外直接投資が米

「ラディカルな怒りに応え、抗する革命的な大衆運動を！ 報復戦争反対！ パレスチナ民衆のインティファダ断固支持！ 有事法制—改憲阻止！」

「アート」と見なす階級観・困・排除を体現する失業我々どほまきに対極にある思想に象徴されている——思想的な破綻をさらけ出し情勢に対応し得ない党派（革共同両派）もある。

したがって、共産主義運動の再生への展望を切り拓き得るかどうかは、これまでも国家や市民社会の側からも闘う側（左翼）からも見捨てられ無視され帝国主義とグローバルゼーションの犠牲を集中して背負われきた人々の存在と闘いを「掘り所」・「モーメント」にして、社会のラディカル（根底的）な変革を担う「主体」と「新機軸」を構想し、従来の思想・政治路線や運動・組織論の創り変え再構築にかかっている。

グローバルゼーションと新自由主義政策の下で、搾取・抑圧され貧困にあえいでいる民衆を、サパティスタ民族解放軍（EZLN）——メキシコ・チapas州のラカンドンの密林を根拠地に虐げられてきた先住民の怒りを組織して「もうなくさんだ」と叫び武装蜂起して戦っている（5面に記事）——は、「排除された人々」と表現し、「世界の中の「排除された人々」のために国際的な連帯行動」をとるよう訴えている。

またフランスでも貧困者や失業者を「排除された人々」（都留民子「フランスの貧困と社会保護」法律文化社）と呼び、雇用・住宅・医療・教育などからの排除との闘いを社会運動・労働運動の重要なテーマとして位置付け——貧困は多様な領域での排除の結果として捉え——、「今日の貧

困・排除を体現する失業我々どほまきに対極にある思想に象徴されている——思想的な破綻をさらけ出し情勢に対応し得ない党派（革共同両派）もある。

したがって、共産主義運動の再生への展望を切り拓き得るかどうかは、これまでも国家や市民社会の側からも闘う側（左翼）からも見捨てられ無視され帝国主義とグローバルゼーションの犠牲を集中して背負われきた人々の存在と闘いを「掘り所」・「モーメント」にして、社会のラディカル（根底的）な変革を担う「主体」と「新機軸」を構想し、従来の思想・政治路線や運動・組織論の創り変え再構築にかかっている。

グローバルゼーションと新自由主義政策の下で、搾取・抑圧され貧困にあえいでいる民衆を、サパティスタ民族解放軍（EZLN）——メキシコ・チapas州のラカンドンの密林を根拠地に虐げられてきた先住民の怒りを組織して「もうなくさんだ」と叫び武装蜂起して戦っている（5面に記事）——は、「排除された人々」と表現し、「世界の中の「排除された人々」のために国際的な連帯行動」をとるよう訴えている。

またフランスでも貧困者や失業者を「排除された人々」（都留民子「フランスの貧困と社会保護」法律文化社）と呼び、雇用・住宅・医療・教育などからの排除との闘いを社会運動・労働運動の重要なテーマとして位置付け——貧困は多様な領域での排除の結果として捉え——、「今日の貧

困・排除を体現する失業我々どほまきに対極にある思想に象徴されている——思想的な破綻をさらけ出し情勢に対応し得ない党派（革共同両派）もある。

したがって、共産主義運動の再生への展望を切り拓き得るかどうかは、これまでも国家や市民社会の側からも闘う側（左翼）からも見捨てられ無視され帝国主義とグローバルゼーションの犠牲を集中して背負われきた人々の存在と闘いを「掘り所」・「モーメント」にして、社会のラディカル（根底的）な変革を担う「主体」と「新機軸」を構想し、従来の思想・政治路線や運動・組織論の創り変え再構築にかかっている。

グローバルゼーションと新自由主義政策の下で、搾取・抑圧され貧困にあえいでいる民衆を、サパティスタ民族解放軍（EZLN）——メキシコ・チapas州のラカンドンの密林を根拠地に虐げられてきた先住民の怒りを組織して「もうなくさんだ」と叫び武装蜂起して戦っている（5面に記事）——は、「排除された人々」と表現し、「世界の中の「排除された人々」のために国際的な連帯行動」をとるよう訴えている。

またフランスでも貧困者や失業者を「排除された人々」（都留民子「フランスの貧困と社会保護」法律文化社）と呼び、雇用・住宅・医療・教育などからの排除との闘いを社会運動・労働運動の重要なテーマとして位置付け——貧困は多様な領域での排除の結果として捉え——、「今日の貧

困・排除を体現する失業我々どほまきに対極にある思想に象徴されている——思想的な破綻をさらけ出し情勢に対応し得ない党派（革共同両派）もある。

したがって、共産主義運動の再生への展望を切り拓き得るかどうかは、これまでも国家や市民社会の側からも闘う側（左翼）からも見捨てられ無視され帝国主義とグローバルゼーションの犠牲を集中して背負われきた人々の存在と闘いを「掘り所」・「モーメント」にして、社会のラディカル（根底的）な変革を担う「主体」と「新機軸」を構想し、従来の思想・政治路線や運動・組織論の創り変え再構築にかかっている。

グローバルゼーションと新自由主義政策の下で、搾取・抑圧され貧困にあえいでいる民衆を、サパティスタ民族解放軍（EZLN）——メキシコ・チapas州のラカンドンの密林を根拠地に虐げられてきた先住民の怒りを組織して「もうなくさんだ」と叫び武装蜂起して戦っている（5面に記事）——は、「排除された人々」と表現し、「世界の中の「排除された人々」のために国際的な連帯行動」をとるよう訴えている。

またフランスでも貧困者や失業者を「排除された人々」（都留民子「フランスの貧困と社会保護」法律文化社）と呼び、雇用・住宅・医療・教育などからの排除との闘いを社会運動・労働運動の重要なテーマとして位置付け——貧困は多様な領域での排除の結果として捉え——、「今日の貧

困・排除を体現する失業我々どほまきに対極にある思想に象徴されている——思想的な破綻をさらけ出し情勢に対応し得ない党派（革共同両派）もある。

したがって、共産主義運動の再生への展望を切り拓き得るかどうかは、これまでも国家や市民社会の側からも闘う側（左翼）からも見捨てられ無視され帝国主義とグローバルゼーションの犠牲を集中して背負われきた人々の存在と闘いを「掘り所」・「モーメント」にして、社会のラディカル（根底的）な変革を担う「主体」と「新機軸」を構想し、従来の思想・政治路線や運動・組織論の創り変え再構築にかかっている。

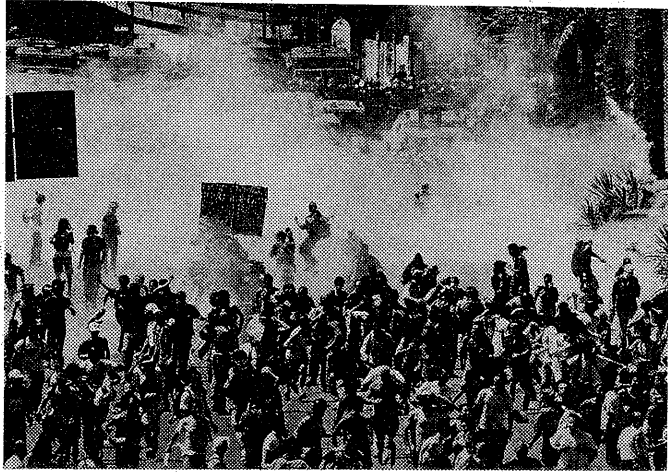
グローバルゼーションと新自由主義政策の下で、搾取・抑圧され貧困にあえいでいる民衆を、サパティスタ民族解放軍（EZLN）——メキシコ・チapas州のラカンドンの密林を根拠地に虐げられてきた先住民の怒りを組織して「もうなくさんだ」と叫び武装蜂起して戦っている（5面に記事）——は、「排除された人々」と表現し、「世界の中の「排除された人々」のために国際的な連帯行動」をとるよう訴えている。

またフランスでも貧困者や失業者を「排除された人々」（都留民子「フランスの貧困と社会保護」法律文化社）と呼び、雇用・住宅・医療・教育などからの排除との闘いを社会運動・労働運動の重要なテーマとして位置付け——貧困は多様な領域での排除の結果として捉え——、「今日の貧

米帝のアフガンの



ムスタファアフパフ議長らの遺影を掲げ、暗殺に抗議するパレスチナ民衆



01年7・21イタリア・ジェノバのG8サミットに反対する人々

国際主義を鮮明に 反戦闘争の前進を

米帝アフガン政権が、昨年9月11日の「米同時テロ事件」に対する「軍事報復」を唱え、アフガニスタンの報復戦争を開始(10月7日夜・日本時間8日未明)してからの3カ月が経

てきたところの「線」を踏み越えたのである。

一方、アフガニスタンをめぐる情勢は、同国を5年にわたる実効支配してきたタリバン政権が崩壊、12月22日には反タリバン勢力の北部同盟を中心とした暫定行政機構が発足して新たな局面を迎えた。

だが、依然として軍閥による群雄割拠や民族間対立といった内戦を再発させる火種は残っている。

米帝による対アフガン報復戦争、そしてタリバンと反タリバン勢力との内戦、という「二つの戦争」が混在する状況の中で、アフガン民衆は、戦火にさらされ貧困と飢餓に苦しめられて

この対アフガン報復戦争で、米帝アフガン政権は、軍事協力を引き出すため、これまで(クリントン前政権時代)その「人権抑圧」や政権としての「正統性」に関して批判してきたパキスタンのムシャラフ軍事政権(クーデター政権)やウズベキスタンのカリモフ政権(警察国家体制)に対し

米帝は、軍事力の維持と戦争によって多国籍資本を守り世界を支配することに

米帝は、軍事力の維持と戦争によって多国籍資本を守り世界を支配することに

最深部一底辺部から燃え上がる 参戦国化と大失業時代に

米帝のアフガン イスラエルの占領支配に抵抗する 日米安保体制粉砕!

テロリズムであると断じるのは余りにもお粗末過ぎないか。また他方で、「暴力反米」の立場から「テロにも戦争にも反対」と唱える見解は、今や反戦闘争の多数派を形成しているようだが、そもそも、「テロと戦争」を同列にして語る事ができるのだろうか。

「9・11テロ」とパレスチナの闘いが、かりに「反米」という点で同根の部分があったとしても、その組織の対極とされるはずの進まないことがテロの背景としてある(中曾根康弘)という言説も間違っていない。だが、問題が一般化し短絡的思考は排すべきだ。

「無差別テロ」を「反米」の「英雄的戦闘」ハートの「壮挙」と称賛する軍閥派や「反米ゲリラ」「民族解放の叫び」「イスラム人の血叫び」として受けとめる中核派、この革命共同前線の反米一國主義ゆえの称賛論には、思想的な破綻が明確に示されている。

「9・11テロ事件」や「湾岸戦争」の特異性は、その元凶が、すべて米帝の「冷戦」終焉後の世界支配戦略の破綻から生み出されているところにある。

「9・11テロ事件」や「湾岸戦争」の特異性は、その元凶が、すべて米帝の「冷戦」終焉後の世界支配戦略の破綻から生み出されているところにある。

や国連平和維持活動(PK O)協力法改正「正」が進み、「自衛隊をめぐる法制整備が一気に進んだ」(12月7日「朝日」)ことがあり、

有事法制化は、77年の福田政権時代に防衛庁が「有事法制研究」に着手して以来、日帝・国家権力に

の長年の懸案事項だった。防衛庁には「テロ事件を受けて国民の関心が高いうちに早期の法整備を目指すべきだ」との火事場泥棒

「治部部からの侵攻など」大規模な軍事行動を想定して、自衛隊による陣地の構築に伴う土地使用や部隊行動を容易にするといった法制

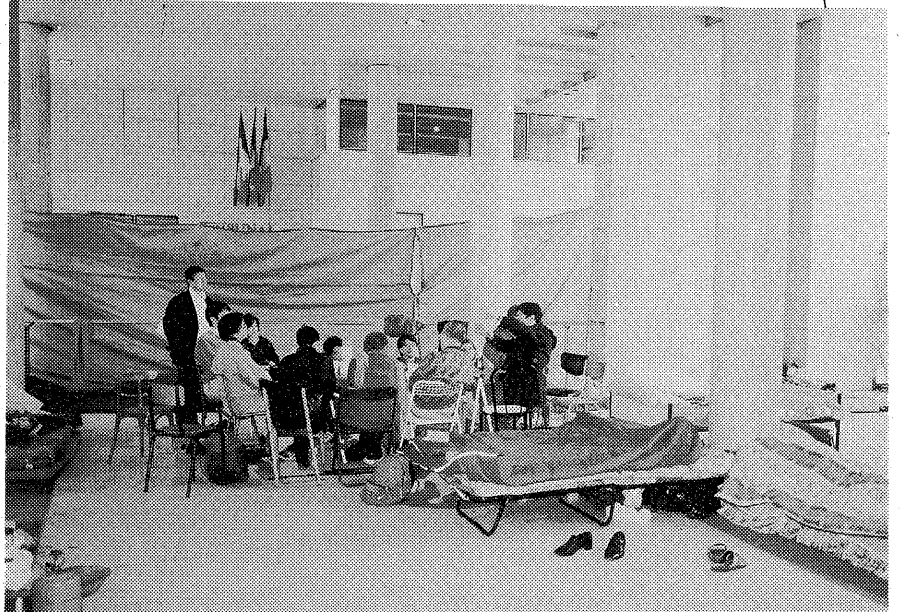
を、テロへの対応など緊急事態にも適用できるように、治安出動や在日米軍基地などの警備出動の際の法整備にまで拡大しようとしている。

〈Ⅲ〉 フランス 訪問報告

グローバルイズムに抗する国際的うねり 仏の社会運動・労働運動との交流



ドロ・デュバンの事務所で
(01年9月27日午前10時)

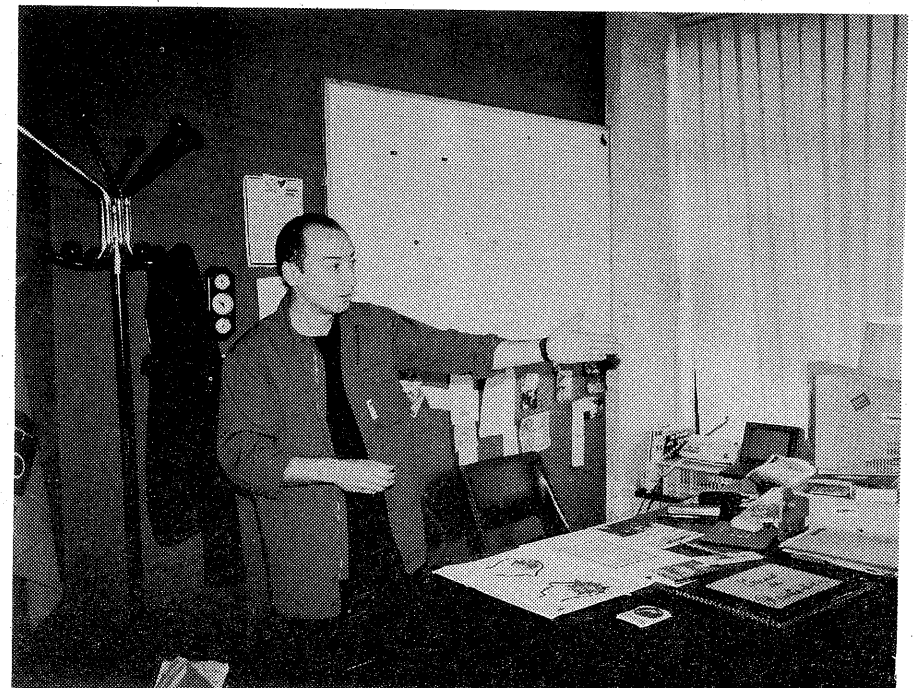


パリ近郊サンドニ市役所前の占拠闘争の場
(01年9月24日午後4時)

反グローバルイズム・反失業の旗掲げ 新たな国際連帯運動を創り出そう!



パリ18区の住宅占拠中の建物の入口
(01年9月29日午後1時)



パリ近郊パンタンのAPEISの事務所
(01年9月25日午前10時)

昨秋フランスを訪れた私たちは、①ACV(アーツ・反失業行動)、②APEIS(失業者・不安定雇用労働者のための互助・情報・連帯のアンシエーション)、③DAL(住宅権利協会)、④Droit Devant(ドロ・デュバン、権利向上協会)、⑤SUD(連帯・統一・民主労組)、⑥ATTAC(アタク、市民を支援するために金融取引への課税を求めるアンシエーション)、といった様々な社会運動・労働運動の担い手たちの討論や交流の場を持つことができた。今号では、約1週間の日程順にその報告をした。

9月24日午前中のSUDの事務所でのACVの人たちとの交流を皮切りに、午後は、パリ近郊サンドニ市役所のロビー前をブルシットで囲って占拠・泊り込み闘争を約1カ月間にわたって続けてきたDALの活動家たちと交流。その後、パリ繁華街・サンラザールで1年前から占拠し30家族が住むビルを訪ね、DALが関わっている住宅占拠闘争は、パリ市内で現在、およそ60カ所と多い。

9月25日は午前中、パリ近郊・パンタン―ここは共産党市長がいていわゆる「赤い郊外」と呼ばれている―にあるAPEISの事務所を訪れ、専従活動家のマチアス・テュクレさんの話を聞く。途中、公営住宅から突然叩き出されたドールさん一家が子供を抱えて駆け込んできた。この強制立ちのきに抗議をしに私たちも一緒に市庁舎に乗り込み議員と交渉。

9月26日午前中、クリストフ・アギトン氏の自宅を訪れ、ATTACの国際担当をしている同氏やピエール・ルッセル氏らと意見交換した。(前号で紹介)

この日の夜(午後7時30分からは、パリ第4大学(ソルボンヌ)で開催された「第3回マルクス国際会議」のオープニングに参加(全体で約350人)。

9月27日、午前中は、ドロ・デュバンの事務所、ジャンクロード・アマラ氏やアニー・プール氏らと討論。彼・彼女は「今の貧困問題はグローバルゼーションの結果なのだから、国際的な連帯活動を広げることが必要だ。搾取・抑圧に反対する立場があれば連帯できる。国境を越えた闘いが可能だ。山谷の団体が最も困難を強いられているのだから、あなたが反グローバルイズムの運動の日本での中心になればいい」と力強い言葉をくれた。

午後は、独立左派系労組SUD・PTT(郵便・電信・電話部門)のエルベール・ケラン氏、バリベニス・アンジェリー氏と意見交換した。アンジェリー氏は「SUDはつくられた当初から他の労組がほとんど関心を示さなかったサンパピエ(滞在許可書のない移民)や失業者と連帯する社会運動と結び付いてきた。労組は社会変革を目指すものという認識がある」と述べた。

9月28日、午前中、DALの代表であるジャン・バティスト・エロー氏に事務所を訪ね、DALは現在、フランス各地に30支部・約1万人の会員を抱えている。エロー氏はDALの活動についてこう語った。「不安定就労者の増大は一定、失業率を低下させてはいるが、貧困層はますます拡大し、そうした人たちが都市の周辺部に追いやられている。住宅不足は深刻になっている。私たちは退去を強制される家族に再入居先を保障せよと要求している。反排除法の成立自体はあまり大きな成果だとは考えていない。政府は、いおう対策をとっているという態度を示したが、根本的な改革にはなっていないと考えている。とはいえ法律は必要だし政策を進める上での予算も必要だ。仏の新しい社会運動は、異議申し立ての闘いを復権させた。私たちは国境を越えて運動を結び付けていくことを追求している」。

9月29日、最終日のこの日、毎週土曜日に占拠中の建物のリーダーが集まるパリ18区のDALの事務所でのミーティングを見学。40人ほどで一杯だ。占拠者のリーダーの一人・ドラムさんは、「一緒に闘いをすることは、とてもいいことだ。建物の占拠にはマリ、セネガル等それまで知らない連中が集まった。一人で解決できないことも同じ目的のために闘うことが重宝なんだ」と熱く語ってくれた。

午後、レヒュリック広場から出発した反戦デモに合流。ATTAC等数千人が結集。そして、4時からACV全国集会に参加。荒木同志が連帯あいさつをした。以上で仏訪問の報告は終える。

(赤井隆樹)

9月26日午前中、クリストフ・アギトン氏の自宅を訪れ、ATTACの国際担当をしている同氏やピエール・ルッセル氏らと意見交換した。(前号で紹介)

この日の夜(午後7時30分からは、パリ第4大学(ソルボンヌ)で開催された「第3回マルクス国際会議」のオープニングに参加(全体で約350人)。

9月27日、午前中は、ドロ・デュバンの事務所、ジャンクロード・アマラ氏やアニー・プール氏らと討論。彼・彼女は「今の貧困問題はグローバルゼーションの結果なのだから、国際的な連帯活動を広げることが必要だ。搾取・抑圧に反対する立場があれば連帯できる。国境を越えた闘いが可能だ。山谷の団体が最も困難を強いられているのだから、あなたが反グローバルイズムの運動の日本での中心になればいい」と力強い言葉をくれた。

午後は、独立左派系労組SUD・PTT(郵便・電信・電話部門)のエルベール・ケラン氏、バリベニス・アンジェリー氏と意見交換した。アンジェリー氏は「SUDはつくられた当初から他の労組がほとんど関心を示さなかったサンパピエ(滞在許可書のない移民)や失業者と連帯する社会運動と結び付いてきた。労組は社会変革を目指すものという認識がある」と述べた。

9月28日、午前中、DALの代表であるジャン・バティスト・エロー氏に事務所を訪ね、DALは現在、フランス各地に30支部・約1万人の会員を抱えている。エロー氏はDALの活動についてこう語った。「不安定就労者の増大は一定、失業率を低下させてはいるが、貧困層はますます拡大し、そうした人たちが都市の周辺部に追いやられている。住宅不足は深刻になっている。私たちは退去を強制される家族に再入居先を保障せよと要求している。反排除法の成立自体はあまり大きな成果だとは考えていない。政府は、いおう対策をとっているという態度を示したが、根本的な改革にはなっていないと考えている。とはいえ法律は必要だし政策を進める上での予算も必要だ。仏の新しい社会運動は、異議申し立ての闘いを復権させた。私たちは国境を越えて運動を結び付けていくことを追求している」。

9月29日、最終日のこの日、毎週土曜日に占拠中の建物のリーダーが集まるパリ18区のDALの事務所でのミーティングを見学。40人ほどで一杯だ。占拠者のリーダーの一人・ドラムさんは、「一緒に闘いをすることは、とてもいいことだ。建物の占拠にはマリ、セネガル等それまで知らない連中が集まった。一人で解決できないことも同じ目的のために闘うことが重宝なんだ」と熱く語ってくれた。

午後、レヒュリック広場から出発した反戦デモに合流。ATTAC等数千人が結集。そして、4時からACV全国集会に参加。荒木同志が連帯あいさつをした。以上で仏訪問の報告は終える。

(赤井隆樹)

「9.11」後の世界とサパティスタ

サパティスタの新刊本完成へ 太田昌国さんが語る

サパティスタの蜂起(94年1月)から8年。その衝撃は、困難な状況下における武装蜂起に止まらず、先住民に依拠した新しい運動思想と国際連帯の可能性を示したところにあった。その内容は、現代企画室から刊行された『もう、たくさんだ』で知ることができた。そして2002年2月には、新たな2冊が刊行される。1冊は、サパティスタの副司令官マルコスとのインタビューを収録した『サパティスタの夢』(イボン・ル・ボ著、もう1冊は、マルコスが自ら書き下ろした『ラカン・ド・密林のドン・ドゥリット』(仮題)である。さらに春には、マルコスのインタビュー集がもう1冊予定されている。そこで今号では、現代企画室の太田昌国さんに登場を願い語っていただくことになった。待ちに待ったサパティスタの本であるが、とりわけこの情勢下で刊行されることは意義がある。「テロ撲滅」を名目とした戦争が正当化される状況において、あらためてサパティスタの武装蜂起の意味や解放の理念を考へてみることは必要である。そのことと同時に、テロリズムや解放闘争の歴史の捉え直しにもつながる、というわけで太田さんには、本書の紹介のみならず、「9.11」以降の世界をいかに見るのか、社会変革のあり方をサパティスタに引きつけて提起してもらった。それは、反グローバリズムの国際連帯運動を志向する上で不可欠の課題である。



2001年2月から3月、首都へ向け行進中記者会見するサパティスタ民族解放軍

マルコス副司令官が語る サパティスタの運動思想

『もう、たくさんだ』はサパティスタの蜂起から1年ちょっとの段階で刊行して、今度の3冊はそれ以来ということになりました。まず『サパティスタの夢』は、フランスの社会学者のイボン・ル・ボによるマルコス副司令官へのインタビューをまとめたものです。1998年の7〜8月にかけて、私自身も参加したチアパスで開かれた国際会議(新自由主義に反対する大陸間会議)に、参加した著者が、そこに居残ってマルコスに長時間にわたるインタビューを行ったもので、原語版(フランス語版)は97年に刊行されました。このインタビューでは、マルコスが自分たちの組織形成の過程を率直に語っている。マルコスたちは都会からチアパスに入ったインテリ活動家たちは、マルクス主義で自分たちの根拠を作ってきた。その人たちがもつとも貧しい民衆のいる山に入り、その地域の自然や先住民の文化や社会的経済的現実と出会い、自分たちがその絶望的な状況をどうしようもない状況で、切り拓いていったかのプロセスが語られている。そこに大きな意味が見出された。『もう、たくさんだ』でも分かるように、彼らの政治表現は

一種独特なスタイルがあって、そこをほぐらば伝統的なマルクス主義の文化と先住民の文化との融合を捉えてきたわけだ。そして、そうした分析を越えるユニークさが読み取れます。次の『ラカン・ド・密林のドン・ドゥリット』は、マルコスが書いた寓話です。『もう、たくさんだ』にも部分的に出てくるように、マルコスは『もう、たくさんだ』で、私自身も参加したチアパスで開かれた国際会議(新自由主義に反対する大陸間会議)に、参加した著者が、そこに居残ってマルコスに長時間にわたるインタビューを行ったもので、原語版(フランス語版)は97年に刊行されました。このインタビューでは、マルコスが自分たちの組織形成の過程を率直に語っている。マルコスたちは都会からチアパスに入ったインテリ活動家たちは、マルクス主義で自分たちの根拠を作ってきた。その人たちがもつとも貧しい民衆のいる山に入り、その地域の自然や先住民の文化や社会的経済的現実と出会い、自分たちがその絶望的な状況をどうしようもない状況で、切り拓いていったかのプロセスが語られている。そこに大きな意味が見出された。『もう、たくさんだ』でも分かるように、彼らの政治表現は

問題意識が明らかになっていいます。

「9.11事件」についてはサパティスタとして、今のところ沈黙を守っている状況です。2000年の流れから言えば、2〜3月にかけての「尊厳の行進」で首都に向けて行進するなかで、立ち寄った村々で集会を持ち、首都では司令官たちが議会で自分たちの主張を述べました。その段階で政治交渉が再開されながらサパティスタの側からすれば十分で、交渉が断たれた状況が続いています。

そうした状況を念頭に置いた上で、9.11以降の流れを考えると、今一番気がかりなことは、行為の主体から理念もメッセージも発せられなかった9.11の行

せられなかった9.11の行為を、もっともたくみに利用したのは国際的反テロ同盟を主導するブッシュの側といえるでしょう。9.11そのものの憎しみと怒りに依拠して発言すれば国内的にも国際的にもどんなことでも可能になる。そんな現実がこの3カ月間、展開されてきたわけです。個別国家内であれば、アメリカが典型的ですけど、反テロという名目でもさまざまな手段を国内的に用いることができるようになってきた。それはいわゆる疑念者の逮捕もあるし、外国人に対する非常に抑圧的な嫌がらせや、有事立法などの法整備が迅速に進行する事態になってきた。

「9.11」以降の世界と解放闘争の理念と倫理

その上で、反テロと言った時にテロリズムの定義づけを急がなくてはならない。世界情勢を分析する上で、イグナシオ・ラモネというフランスのジャーナリストが2000年にチアパスに行つてマルコスにインタビューしたもので、正式な書名はまだ決まっていますが、『マルコスの反乱』という尊厳」といって考へています。ラモネ氏はA.T.A.C.など反グローバリズム運動の火つけ役ともいえる「ル・モンド・ディプロマティーク」に関わっていた人でもあり、このインタビューでもマルコスの反グローバリズムに関わる

うと思う。9.11についてのよう捉えるのは、割と早い段階で『図書新聞』のインタビューで語りました。それから3カ月経っているけれども、あの段階で言ったことは今でも間違っていないと思っています。テロといっても、テロをもって何を言おうとしているのかの問いを外すわけにはいかないといふことです。例えば、ロシアのナロードニキにせよ伊藤博文を暗殺した安重根にせよ、その時代状況のなかではある種の切実さをもったテロリズムの切実さで、後世の人間が「暴力だからいけない」と簡単に断じて仕様がなくなってしまう。そういうものが歴史的にもあるわけだし、それは現実-現在の中にもあるかも知れない。ぼくは考える人間なので、最初からなんでもテロには反対と言っちゃうと、そこにはほらまれている問題の大事さというものを洗い流してしまう。そこはこだわって、一つの行為が一体どんな意味を持つのかを、踏み止まって考えた。

ただ、やはり9.11の行為に関しては、メッセージ的なものというよりも、その活動の中で選択された行為であったとすれば、その解放の理念や倫理を持っていないと思ふから、それは決定的な間違いだと言わざるを得ない。そう考えると、ぼくは自身の60年代から70年代にかけての、世界情勢の見方と同時に、日本国内の中での暴力レベルの問題にもかかわっているからです。

社会的実践課題としての反グローバリゼーション

そして、それらの出発点はすべてこの10年間にわけての国軍自衛隊の問題になる。つまり、カンボジアPKO以来、自衛隊を国外に出すという政治的な動きが始まった。10年前はほとんどが抗議したけど、今回のアフガンにおいても国軍としての自衛隊がどんどん海外に出てゆく現実が作

それはどうも考えにくい。それは、60年代以降の武力にもつて解放運動なりゲリラ闘争が、いつかの国では勝利を収めつつも多くの場合、悲劇的な結果を招いてしまった。それは、武力至上主義がもたらしたものでなかったかと、そういう総括をサパティスタが言葉としてやっているわけではないけれど、暴力の問題を考へなければならぬ。というぼくの問題意識と一致したんです。ゲバラの問題をこの間、書いていたのも、ゲバラの軍事優先主義が60年代後半のコンゴやボリビアで、あるいは革命40年のキューバの中で、どういふ現れ方をしているのかというところを考へたんです。大きな社会的実践課題といえます。もちろん、受け入れたい、手に入れば良いという欲望のあり方を、ぼくらは断ち切れているわけではない。ただ少なくともそういう自分たちの社会を対象化し、分析することはできるし、そこで自分たちの社会のあり方についてはどういふ問題がはらまれているかという方向に変えるべきかが見えてくる。善きままたることを知りつつ対象化するという自覚的な方法がもつてきたわけなんです。自衛隊批判というのは、その対極に、じゃあ人民軍は、解放軍はいいのかという問題が背中合わせにある。それを無視して抑圧軍としての国軍を持つ国家体制それ自体の批判に終わることはない。そうした捉え返しがないと、国が当たり前の顔して持っている軍隊が行う戦争の問題、それが国益を背負って海外に出て行って、爆撃したり後方支援をしたりするという問題の解決に新しい社会を構想することはできないんじゃないか。

最後に、グローバリゼーションの課題については、日本では国際的な視野をもつた反グローバリゼーションの社会運動がきちんと育つてきたか、という問い返しで自分の中にある。グローバリゼーションは、スニーカーに並んでいる商品やユニクロの衣服一つ見ても、身近に感じられるわけだけれども、ではどういふ構造の問題を、これだけ経済格差がある世界の中でいふ問題としてとらえるかというのには、非常に大きな社会的実践課題といえます。もちろん、受け入れたい、手に入れば良いという欲望のあり方を、ぼくらは断ち切れているわけではない。ただ少なくともそういう自分たちの社会を対象化し、分析することはできるし、そこで自分たちの社会のあり方についてはどういふ問題がはらまれているかという方向に変えるべきかが見えてくる。善きままたることを知りつつ対象化するという自覚的な方法がもつてきたわけなんです。自衛隊批判というのは、その対極に、じゃあ人民軍は、解放軍はいいのかという問題が背中合わせにある。それを無視して抑圧軍としての国軍を持つ国家体制それ自体の批判に終わることはない。そうした捉え返しがないと、国が当たり前の顔して持っている軍隊が行う戦争の問題、それが国益を背負って海外に出て行って、爆撃したり後方支援をしたりするという問題の解決に新しい社会を構想することはできないんじゃないか。

インタビュー・藤川次郎

山谷から反失業・反排除の闘いを

韓国民主労総と交流 山谷で国際連帯の集い勝ち取る

「反グローバリズムと国際連帯」と題して連続した取り組みが山谷労働者福祉会館で成功裡に勝ち取られた。第一弾は11月17日、フランス訪問報告。既に本紙10月11月号での報告にもあるように、山谷からフランスの運動現場を訪問し、相互交流を実現したのは画期的な試みだ。その報告集が山谷の会館で、多くの労働者や支援の仲間を集めて行われたことの意味は大きい。集いはまず、これまでの山谷がフランスの運動と出会った経緯―稲葉

奈々子さんの提起に始まり、クリストフ・アギトンさんの来日、SUD(連帯・統一・民主主義)メンバーの来日―を押さえた上で、写真も交えての実感あふれる報告に始まり、フランスの失業者やホームレス、移民労働者らの運動の現状、日本の共通性や違い、何を学んできたかが話された。とりわけ多様な運動が個別課題に埋没することなく全体状況(グローバリズム)を捉える問題意識、当事者を主体とした大衆運動における民主主義の

あり方、ラジカルで斬新な発想などがポイントといえる。参加者からは、次々と質問がなされ、またA.T.T.A.C. Japan(7面の報告参照)結成準備会の方からも提起がなされ、山谷から反グローバリズムの闘いを立ち上げてゆく上で意義のある場となった。

第二弾は11月28日、韓国民主労総の組合メンバーを迎えての山谷と韓国を結ぶ連帯と交流の集い。今回はアジア共同行動日本連絡会議(AWC)主催の「アジア太平洋民衆大会」出席の

ために来日したもので、AWCの尽力もあって山谷での催しが実現した。韓国労働運動を牽引する民主労総のメンバーが山谷を訪問するのは初めてのことで、集いに先だって、韓国通信労組の支部長を務める女性メンバーが、隅田川沿いを一緒に歩き、野宿の仲間とも対話した。彼女は、多くの労働者が野宿生活を強いられる日本の首都の現実と心の底から憤っていた。

集会では、韓国での「山谷」の上映会を実現して帰ってきたばかりの会館活動

「ホームレス特別法」が自民・公明・保守の与党3党主導で1月からの通常国会で制定されようとしている。我々は、排除を前提にした「ホームレス特別法」には断固として反対する。6月に上程された民主法案は、11月になって自民党と民主党の共同提案という形になったと報道された。そこには「(国、自治体が)総合的施策を実施してもホームレスにより公園、道路などの利用が妨げられる時は、管理者が必要な措置をとる」と、明らかな排除を意図した条項が加わった。

委メンバーが持参した、民主労総の闘いの軌跡を描いたビデオを上映。ダイジェストながら、不屈に闘う民主労総のエネルギーが会場に盛り上がり、会場は大いに盛り上がる。続いて通信労組メンバーから隅田川を回った感想と韓国での自身の闘いが述べられる。韓国の「構造改革(構造調整)」は、日本に数年前先立ち金大中政権下で強行された切りの嵐が吹き荒れた。この労働者切り捨ての攻撃に対し、95年に結成されたN.T.T.にあたる韓国通信でも6万人中2万人解雇という空前の攻撃のなかで、ス

トライキや職場占拠で決起した。その心意気に、会場の参加者から惜しみない拍手が送られたのだ。続いて、到着したばかりの民主労総の組合員たちが続々と発言。航空貨物輸送を扱う多国籍企業であるFedexでは、苛酷な労働条件の改善を求めて闘いが始まった。今回来日した民主労総Fedexでは東京での闘争(米国本社との交渉)を貫徹。山谷をはじめ日本の支援者も多く駆け付け、グローバリズムを撃つ日韓労働者の共同の闘いと

「部分にすぎない」とは到底言えないだろうし、懸念や不安は現実のものになりつつある。とりわけ、当事者の運動が作られていない地域においては、排除の意志はストリートに貫徹されるだろう。ゆえに、運動の側が排除条項にこだわっていない姿勢を見せることは禁物である。自公保与党3党は「構造改革」路線の下、膨大な「痛み」を我慢しろと労働者に押しつけ、雇用対策の欠落した上辺ばかりの「ホームレス対策」を取り繕い、排除を正当化せんと目論んでいる。少なくとも、現下の情勢ではこの新法を通さざるわけにはいかない。権力による運動の分断を許さず団結して新法を阻止しよう。(藤川)



民主労総Fedex労組の組合員たちのあいさつ
(11月28日・山谷労働者福祉会館にて)

今年もまた厳しい冬将軍の時期が到来した。完全失業率が9.5%を超え、ゼネコ倒産も本格化し、他方で「テロ」を口実とした自衛隊の派兵―参戦が進行される中で、山谷越冬・越冬闘争が闘い抜かれる。

本越冬・越冬闘争の位置と意義の第一は、94年以降の反失業―野宿労働者運動が転換点を迎えて、これまでの延長線上からは一歩も前進しえぬ地点に至り、次の飛躍が問われているものとして闘い抜かれることだ。パブル崩壊以降、新自由主義政策への転換に本格的

突入を開始した中で、「オシロイ」は「ミシロイ」に「屋根と仕事をよせよ」と声をあげて来た反失業―野宿労働者運動は、寄せ場で形成されて来た「黙って野垂れ死ぬな」「仲間間の力で一人の餓死・凍死者も出さな」という下層労働者運動の地平が、大失業情勢の只中で拡大を勝ち取る。共に、「権利」獲得を掲げた対行政行動として大衆的基盤を形成してきた。

次期国会に於いて与野党による「ホームレス特別法」が提出されようとする情勢下で、これまでの闘いが如何に失業―野宿に至る

根拠に迫りえたが、冷徹に検証される。使いつて野垂れ死を強いる支配構造が再編強化され「権利」主体の自己決定権が自己責任―自立の下に社会的排除を法制度化せんとして来ている。資本と支配の総体を撃つことな

1・3 山谷でパレ
スチナ連帯集会を
本越冬・越冬闘争は排除情勢を迎え撃つものではな

「一人の野垂れ死も許さない
釜ヶ崎越冬闘争へ」
第32回釜ヶ崎越冬闘争が12月25日から闘われる。野宿労働者の数がすでに一方を越す大阪では釜ヶ崎だけでなく広範囲で拡散している。さらに公園や路上、軒下からの追い出しや襲撃が後を絶たない。しかも行政のシェルターや自立支援センターは全くといって機能せず再び路上へと追いやら

公的雇用の創出が求められている。その一歩が反失業闘争だ。市・府から特別就労の枠を確実に勝ち取っている。西成公園ではシェルター建設―入所を巡って、公園の仲間たちが一人一人の生き方を要望を賭けて大阪市との攻防を闘い抜いている。このように中で越冬闘争は釜ヶ崎・野宿労働者の生存を賭けた闘いとなっている。一人の野垂れ死にも許さず、就労拡大に向けて越冬闘争を全力で闘い抜こう。

1・14 全国から山谷・玉姫公園へ 越冬・越冬闘争で団結打ち固め

このことによって支配状況全体を撃たんとした佐藤満夫氏、常に全体状況の中に下層を位置付け、国際主義を實踐した山岡強一氏、我々は断り切られた者の連帯を必ず引き継ぎ連なっていく決意である。

山谷越冬・越冬闘争は、非道徳・理不尽な資本と支配を撃つ熱い地獄をもつて、厳しい冬将軍と対決する。山谷センター前を拠点に、飯小屋が集中する上野・隅田川を結び、仲間の団結のネットワークで野垂れ死ににさらされた仲間を防御し、隊伍を整えよう。

国際連帯企画(1月1日・韓国民主労総の闘い、2日・外国人労働者、3日・パレスチナ)を新たな試みとして労働者とともに。

新宿、池袋、渋谷など全都の越冬布陣を打ち固め、1・14山谷へ! (荒木)

佐藤さん虐殺17力年弾劾!
山岡さん虐殺16力年弾劾!
日雇全協反失業
総決起集會
1月14日・午前10時・山谷玉姫公園
(集会后7時)

沖縄 沖縄の日本「復帰」(再併合)30年弾劾 安保粉砕、米軍基地撤去へ

「復帰」再併合 30年の新たな年

2002年は、沖縄の日本「復帰」(再併合)から30年目を迎える節目の年である。72年5・15「復帰」とは、日本(ヤマト)が沖縄を自らの国益に属属させ、沖縄の意思を踏みにじった「再併合」の日である。歴史的には、明治維新政府が軍事的に断行した1879年「琉球処分」以降、「国内植民地」として過酷な搾取と収奪、徹底的な同化と皇民化政策のもとでの「皇民化」が強制され、大多数の住民が犠牲となった唯一の悲惨な地上戦としての沖縄戦。敗戦後は、52年サンフランシスコ講和条約による沖縄の分離、過酷な米軍支配下の叩き込み(第2の「琉球処分」)を経て、72年「復帰」という第3の「琉球処分」がなされるのである。

「復帰」以降、沖縄人民は基地との闘いの連続であった。沖縄・反戦地主の30年に及ぶ反基地の闘いは、日本政府による土地強奪との闘いに他ならない。97年2月から開始された公開審理闘争は丸2年間継続し、その中で戦後53年にわたって土地を奪われ続けた沖縄の地主たちの思いが満ちあふれるほど述べられた。また基地があるが故の事件・事故に沖縄人民は怒りを

燃発させた。95年の米兵による少女レイプ事件への沖縄人民の怒りは、95年10・21の8万5千人集会にみられるように、島ぐるみの闘いとして展開した。沖縄は訴える。「安保も基地もいらない」と。大衆的な反戦・反基地のうねりは、安保に風穴を開けるまでに大きく安保の根幹を揺るがせて来たのだ。

「再併合」30年目の新年を迎え、あらためて日本と沖縄の抑圧・被抑圧関係を正面から見据え、「沖縄のことは沖縄人民が決める」という自決権を取り戻す沖縄人民の闘いと連帯する必要がある。12月14日、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック主催で「米軍用地特別措置法違憲訴訟判決報告会&名護新基地建設をめぐる学習会」が東京・文京シビックホールにて開かれた。

97年に改定された米軍用地特措法は、軍用地の強制収用期限が切れても暫定使用できるとする「試合の途中でルールを変える」悪法であり、沖縄の反戦地主を狙い撃ちにする、とんでもない法律である。反戦地主8人が、この改定特措法が憲法の定めた財産権や適性

ないまま……占有した」これに「公権力の行使によるものとするのが相当」である「たとえ不測の事態があったからといって法律により行政をなすべき」国が「なんらの権原なく故意に個人の土地を占有する理由とはならず」国は「責任を負う」との判断である。この判決は当然とはいえない大きな意義がある。松島弁護士は那覇地裁の判断を「法律家として最低限のモラルを守った」判決と評価した。しかし、他方で改定特措法そのものは「違憲とはいえない」と判断した。つまり裁判所の言っていることとは「安保条約で日本政府に土地提供義務があるのだから、財産権を奪ってよろしい」という判決の構造であり、許されないと憤りをもつて報告した。

手続に違反し違憲であるとの訴えを裁判で争ってきた。この訴訟の判決が、11月30日に沖縄・那覇地裁で下されたのである。判決については、松島弁護士から報告があった。また判断した。判決文は明快である。国は知花さんの土地の何らの「権原も有し

反グローバリズムと国際連帯 アタック・ジャパン結成される

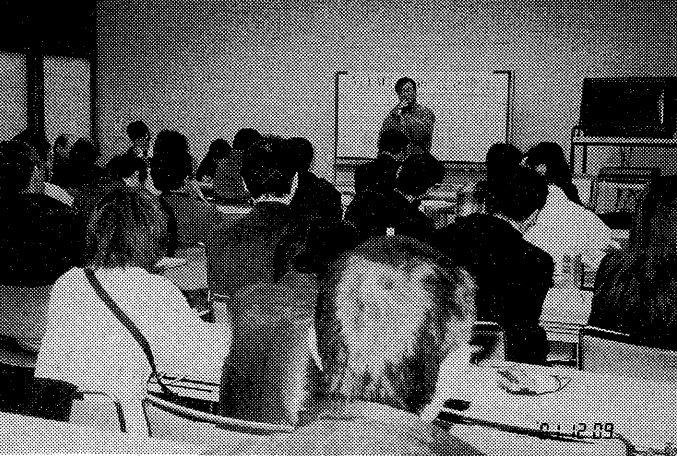
12月9日、ATTAAC(アタック・ジャパン)設立総会が東京新宿区若松地域センターで勝ち取られた。ATTAAC(市民を支援するために金カ、ラテンアメリカを世融取引への課税を求めるア

ソニエーションは、新自由主義的グローバリゼーションと対決する国際連帯運動として、フランスで始まり、欧州はもとよりアフリカ、ラテンアメリカを世界各地に拡大している。この5月には、代表のベルナルド・カッセンさんが来日(本紙6月号参照)して、日本でのATTAAC結成が呼びかけられた。以降、シ

「不法占拠を認定 12・14報告会開催」 12月14日、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック主催で「米軍用地特別措置法違憲訴訟判決報告会&名護新基地建設をめぐる学習会」が東京・文京シビックホールにて開かれた。

97年に改定された米軍用地特措法は、軍用地の強制収用期限が切れても暫定使用できるとする「試合の途中でルールを変える」悪法であり、沖縄の反戦地主を狙い撃ちにする、とんでもない法律である。反戦地主8人が、この改定特措法が憲法の定めた財産権や適性

ないまま……占有した」これに「公権力の行使によるものとするのが相当」である「たとえ不測の事態があったからといって法律により行政をなすべき」国が「なんらの権原なく故意に個人の土地を占有する理由とはならず」国は「責任を負う」との判断である。この判決は当然とはいえない大きな意義がある。松島弁護士は那覇地裁の判断を「法律家として最低限のモラルを守った」判決と評価した。しかし、他方で改定特措法そのものは「違憲とはいえない」と判断した。つまり裁判所の言っていることとは「安保条約で日本政府に土地提供義務があるのだから、財産権を奪ってよろしい」という判決の構造であり、許されないと憤りをもつて報告した。



アタック・ジャパン設立総会で発言する山谷争議団荒木同志

えな」と判断した。つまり連帯のあいさつは、ドイツでATTAACゲルンを結成したマリヤ・ミースさんがドイツの状況を報告。社民政権や労組への失望から反グローバリズムの運動が着実に広がっていること、人材の育成、理論の深化、抵抗運動の組織化といった課題への積極的な取り組みの必要性が述べられた。続いて、日韓投資協定、労働運動、移住労働者、食政策農業、反戦など多分野の運動体から報告とアピールが行われた。呼びかけに応じて参加した山谷争議団の荒木同志は、山谷から反グローバリズムと国際連帯の闘いを提起した。集会の最後に「新自由主義グローバリゼーションに対し異議申し立てをしている全世界の人々を連帯し」「もうひとつの世界の可能性を求めて、多くの民衆の希望や未来をこの心にしたATTAAC Japanがスタートしたのである。設立総会は50人近くが結集し、結成にいたる経過と意義が提起された。(藤川)

「アタック・ジャパン」の時代は、共産主義運動の解明を目的し、今日においても基地の重圧の下で呻吟する沖縄の解放(呼びかけ文抜粋)へ向けた取り組みである。

11月17日、専修大学(神田区)にてシンポジウム「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動について」が開催された(主催は11・17実行委)。この企画は、「敗戦直後から復帰までの南西諸島、なかでも沖縄諸島の『空白』の時代の社会・共産主義運動の解明を目的し、今日においても基地の重圧の下で呻吟する沖縄の解放(呼びかけ文抜粋)へ向けた取り組みである。

11月17日、専修大学(神田区)にてシンポジウム「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動について」が開催された(主催は11・17実行委)。この企画は、「敗戦直後から復帰までの南西諸島、なかでも沖縄諸島の『空白』の時代の社会・共産主義運動の解明を目的し、今日においても基地の重圧の下で呻吟する沖縄の解放(呼びかけ文抜粋)へ向けた取り組みである。

11月17日、専修大学(神田区)にてシンポジウム「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動について」が開催された(主催は11・17実行委)。この企画は、「敗戦直後から復帰までの南西諸島、なかでも沖縄諸島の『空白』の時代の社会・共産主義運動の解明を目的し、今日においても基地の重圧の下で呻吟する沖縄の解放(呼びかけ文抜粋)へ向けた取り組みである。

11月17日、専修大学(神田区)にてシンポジウム「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動について」が開催された(主催は11・17実行委)。この企画は、「敗戦直後から復帰までの南西諸島、なかでも沖縄諸島の『空白』の時代の社会・共産主義運動の解明を目的し、今日においても基地の重圧の下で呻吟する沖縄の解放(呼びかけ文抜粋)へ向けた取り組みである。

11月17日、専修大学(神田区)にてシンポジウム「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動について」が開催された(主催は11・17実行委)。この企画は、「敗戦直後から復帰までの南西諸島、なかでも沖縄諸島の『空白』の時代の社会・共産主義運動の解明を目的し、今日においても基地の重圧の下で呻吟する沖縄の解放(呼びかけ文抜粋)へ向けた取り組みである。

稿 連載「試論—ブントと新左翼運動を検証する」を終えて 新左翼運動の原点・ブント主義を考える 蔵田 計成

新左翼の歴史の創成過程の「反帝・反スタマルクス」を「ブント主義」と「革共主義」とも、トロツキーと同主義の二項対比において「労働者団体的関係性において捉える」と総括することはきわめて妥当である。その理由は、この二項対比の構造が、60年代、70年代を経て、それ以後に至るまでの新左翼運動の過程で連続してブント主義の存在したからである。しかも、そこにおいて展開された運動組織論と建党組織論は、両者がそれぞれ組織に内包する長短両面性として、新左翼運動の基盤部をなしているが故に、その手法は意味を持つのである。この間の連帯において提起したいいくつかの問題点を、この視点から整理しておこう。

第1点、1次ブントが当時の歴史状況に対して切結んだ前衛論にみる綱領的立場は、当時の世界公認共産党掲げる「不拔の前衛党」「一枚岩の世界共産主義者党」「二国一階級・一前衛党・一大衆団」という前衛絶対神話の呪縛からの自己解放であった。その政治綱領においては、平和共存、一国社会主義、平和革命論に対して世界革命、プロ独、永続革命、暴力革命論を対置した。第2点、スターリン主義の批判に関しては、それは世界革命の中で同時一体的に打倒されるべきものであり、当面の打倒すべき対象「反革命」とは指定しなかつた。その点では、革共同

の論理のもと、イデオロギイ主義的、綱領主義的の純化を目指した「同心円的組織拡大路線」と、その味を持つのである。この間の連帯において提起したいいくつかの問題点を、この視点から整理しておこう。

第1点、1次ブントが当時の歴史状況に対して切結んだ前衛論にみる綱領的立場は、当時の世界公認共産党掲げる「不拔の前衛党」「一枚岩の世界共産主義者党」「二国一階級・一前衛党・一大衆団」という前衛絶対神話の呪縛からの自己解放であった。その政治綱領においては、平和共存、一国社会主義、平和革命論に対して世界革命、プロ独、永続革命、暴力革命論を対置した。第2点、スターリン主義の批判に関しては、それは世界革命の中で同時一体的に打倒されるべきものであり、当面の打倒すべき対象「反革命」とは指定しなかつた。その点では、革共同

の論理のもと、イデオロギイ主義的、綱領主義的の純化を目指した「同心円的組織拡大路線」と、その味を持つのである。この間の連帯において提起したいいくつかの問題点を、この視点から整理しておこう。

の論理のもと、イデオロギイ主義的、綱領主義的の純化を目指した「同心円的組織拡大路線」と、その味を持つのである。この間の連帯において提起したいいくつかの問題点を、この視点から整理しておこう。

三里塚 暫定滑走路阻止

3・31―4・14へ決起を 反対同盟の闘いと連帯し

暫定滑走路完成粉砕、空港廃港へ向けて、管制塔の機能が破壊をきたし、三里塚芝山連合空港反対同盟より、2002年を勝利の年とする断固たる決意の年頭アピールを掲載する。

反対同盟の不屈の闘いにより、暫定滑走路が欠陥だらけであることが暴露出されている。国際空港としては短く、使いものにならないだけでなく、市東さんの畑などの厳然とした存在は、誘導路が「へ」の字に折れ曲がるというおぞましい姿をさらけ出している。三里塚に離着陸する航空機をすべて自視し、なければならぬ管制塔が、一部自視

できず、管制塔の機能が破壊をきたし、三里塚芝山連合空港反対同盟より、2002年を勝利の年とする断固たる決意の年頭アピールを掲載する。農民に強制し叩き出すとして、暫定滑走路は農民の生活破壊であり、叩き出し攻撃だ。この殺人的ともいえる攻撃に抗し、闘う反対同盟との連携を深め2002年の闘いに勝利しよう。1・13三里塚新一年デモと旗開きを皮切りに3・31三里塚現地闘争、4・14全国総決起集会を勝ち取り、4・18暫定滑走路開港粉砕へ！

反対同盟年頭アピール



反対同盟事務局長 北原 鉦治

暫定滑走路を許すか否か 2002年を決戦の年へ

2002年、暫定滑走路開港を許すか否かという決戦の年をかえしました。反対同盟は99年12月の着工以来2年間を臨戦体制で闘い抜きました。全国集会とあわせて現地では連月闘争を闘い、6月の東峰神社の立米伐採に対しては住民と兵に反対同盟は全力で機動隊・ガードマンとの実力攻防戦に決起しました。秋、原事務局長の不当逮捕に

対して、弁護団を初め同盟一丸となった反撃は権力の不当性を明らかにして早期奪還を実現しました。工事強行からテスト飛行強行で明らかになったこと、滑走路が使いものにならないという反対同盟の主張の正当性です。テスト飛行では、小型のYS11のプロペラ機をアライバイ的に使いましたが、管制塔からの死角があるなど問題点が噴

出しています。又、新たに騒音地域に入っている滑走路北側の住民からも、反対同盟の行ったアンケートに多くの不安と移転反対の声、反対同盟の激怒が寄せられました。久住中学校の移転問題では、生徒達がプラカードを持ち説明会場に坐りこみ、マスコミでさえ、かつての少年行動隊とダブらせて報道しました。確実に我々の闘いは勝利しています。公団を追いつめ空港廃港への道を攻めぬぼる大きな闘いが4月の全国集会です。アメリカの戦争に、自衛隊が出兵しました。アフガニスタンでは空爆で多くの民衆の命が奪われてい

1・13
2002年新年デモと旗開き
時/1月13日(日)
●新年デモ 午前10時 市東さん方南側
●団結旗開き 午後1時 芝山会館
主催/三里塚芝山連合空港反対同盟



敷地内東峰 萩原 進

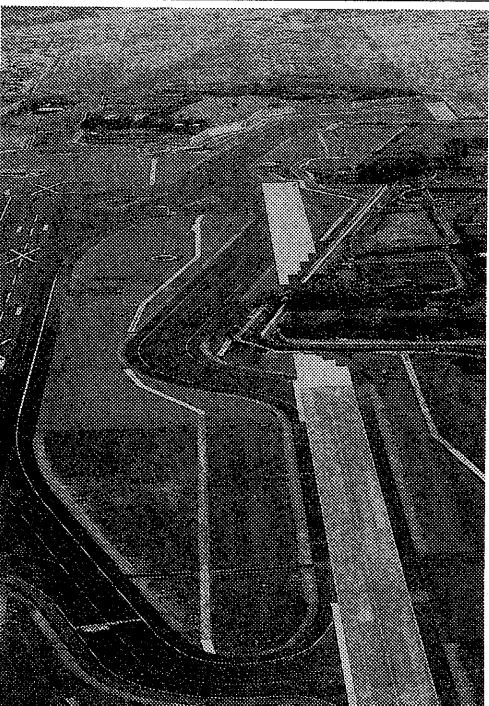
闘いは欠陥空港を暴く 実力闘争こそ勝利への道

全国で権力の横暴に抗し闘い抜く皆さん。反対同盟は、暫定滑走路粉砕を掲げ、滑走路の欠陥が明らかになってきました。我々の闘いは、確実に権力・空港公団を追い込んでいます。公団は、暫定滑走路の工事強行を推し進め、民家の上空40メートルに飛行機を飛ばそうとしています。殺人的ともいえるテスト飛行にまで踏み込みました。住民の日常生活を破壊しつづ

闘いで、日本の未来を戦争ではなく、平和へと切り拓く重要な闘いが2002年の闘いです。反対同盟は、1月13日の敷地内デモと旗開きを皮切りに、4月の暫定滑走路開港阻止へ連帯闘争にうつて出ます。3月31日の現地闘争から4月14日全国集会に、全国からの結果を呼びかけます。全力での決起をお願いします。



三里塚敷地内をデモ (01年12月8日)



市東さんをはじめ反対同盟の闘いによりへ字に折れ曲がった誘導路

10月15日からテスト飛行を開始した政府(国土交通省)・空港公団は、11月14日から民家の上空たった40mを飛行する南側からの進入テスト飛行を強行した。そもそも暫定滑走路は、国際標準すら無視し農家の

11・21―12・8 現地闘争を闘う 暫定滑走路完成粉砕、テスト飛行阻止

11月21日には「暫定滑走路完成粉砕、テスト飛行阻止」を掲げ反対同盟先頭に敷地内デモを貫徹した。天神峰の市東さん宅では、開拓道路に反対同盟と支援が結集。北原鉦治事務局長は「農民叩き出しのための暫定滑走路は許さない。成田空港の軍事使用を許さず参戦攻撃と戦おう」と力強く挨拶した。デモは、小見川県道から東峰部落を通り東峰神社を経て暫定滑走路に食い込んで開拓道路までの往復。怒りのシユブ

つくりあげること活路を見出そうとしています。グローバリゼーションの荒波の中で、小泉政権は、労働者切り捨ての「痛みを伴った構造改革」を強行せんとしています。戦争と大失業の時代に、三里塚のように実力闘争で闘えば勝てる、ということ



敷地内天神峰 市東 孝雄

目の前を飛行機が横切る 追い出し攻撃を許さない

11月21日には「暫定滑走路完成粉砕、テスト飛行阻止」を掲げ反対同盟先頭に敷地内デモを貫徹した。天神峰の市東さん宅では、開拓道路に反対同盟と支援が結集。北原鉦治事務局長は「農民叩き出しのための暫定滑走路は許さない。成田空港の軍事使用を許さず参戦攻撃と戦おう」と力強く挨拶した。デモは、小見川県道から東峰部落を通り東峰神社を経て暫定滑走路に食い込んで開拓道路までの往復。怒りのシユブ

打ち破る事はできません。2002年、我々は反戦の岩として三里塚闘争を闘いぬきます。この闘いを普遍化し、拡大し、勝利に向かって攻め上ります。全国から三里塚に結集し、共に闘おう。は以前にもまして、いやがらせの検問がひどくなっています。誰かわかたうえで、畑から帰るトラクターを機動隊が止める。道で私服の車とすれ違つてUターンしていつている。このよう